

## 特集に当って

松原 望

昔、中国の杞の国の人が、天がくずれおちることはないかと心配し、外も歩けなかったことから「杞憂」の故事が出典した。心配は、事柄の性質上無限定なものであるが、E. ボレルも『確率と生活』（クセジュ文庫）でいうように、いろいろな段階の確率を、それぞれ人間は無視することにより、人間の生活が一応は成立している。

「安全」「リスク評価」ということで、再び、そこに足を踏み入れれば、非常にむずかしい問題が横たわっていることは当然である。社会全体に余裕というものができるならば、「安全」というものも追求してよい価値ではあるが、一般的に言えば、いかなるリスクの問題も、それに関連してつながっている事柄がきわめて多く、それに触れずに問題を解決することはむずかしい。社会的リスクとは、そういう意味である。ゆえに、トレード・オフは必ずおきてくる事柄の性質である。

したがって、また、容認レベルの問題、コストの問題なども生じる。

問題の解決は、リスクの局面に応じてさまざまである。規制値、容認レベルを決定するもの、対策、対応の制度を創設、整備しておくもの、まずリスクの評価法を確立することが目的のもの、等々さまざまであるが、多くの場合、解決は「最終的」「抜本的」なものではない。それは、当事者の問題というよりも、リスクが非常に広く、深い奥行をもっているため、事柄の定

義上、どこまでくれば解決かがはっきりしないからである。

また、「安全」は、本来、それを論ずるにおよばないことが達成の証しであり、安全の機具、制度は、それが発動されないことが、目的の達成である。この一見の逆説が本質の中に潜んでいるため、要不要の議論、コスト算定の議論も、ただでさえむずかしいものがしばしば紛糾混乱する。複雑な現実を注意深く腑分けすることが大切であろう。

「安全」や「リスク」の問題は、自然科学、工学、社会科学、人文科学の諸分野が交錯する領域で、視座をある程度定めなければ、全体像も見えてこないであろう。しかしながら、「社会的安全性」というとき、社会一般の人々が、“安全”と思うくらいに十分安全、ということではなければならない。定義の中に、「社会」を媒介として導入することである。新幹線は、人がそれを安全と思うとき、また、そのときにのみ、乗るのである。実体的、技術的安全のみでなく、その外側に、認識 (perception) というもう一層がかぶるのである。実体的安全はその担保となるのであるから、これがなかなか確立しがたいときは、社会の認識も追隨してこない。

ORは、この実体的安全を中心に研究をすることにはなると思われるけれども、社会の認識のほうが非常に大きい割合で、この議論にかかってくるのであるから、社会的リスクという考え方は重要である。それがこの特集の狙いである。

この特集でいう社会的リスクは、通常いう societal risk よりはやや広く、社会システムとリスクというくらい、やや緩い意味で用いた。

本特集のために、各分野から、その分野のリスクの核心をついた多くのすぐれた論文が寄せられた。ここに、謝意を表したい。